

近代日本に於ける『警世通言』卷二「莊子休鼓益成大道」の受容について

—— 発見された近藤總草訳「莊子とその妻」(1930)を中心として ——

勝山 稔

はじめに

中国では明代以降に『西遊記』『三國志通俗演義』『水滸傳』『金瓶梅』そして『紅樓夢』などの白話による通俗小説が世に送り出された。そのため日本でも江戸時代にはこれら通俗小説が舶来し、その翻訳が様々な人物により試みられるようになった。

その傾向は明治以降も継続するが、ここで不可解な現象が確認される。それが明治・大正時代から終戦直後までの期間は翻訳活動の中心的役割を果たしたのが民間の知識人であり、当時の大学の研究者は殆ど翻訳に関与していなかったという点である。

一例を挙げると、明代短篇白話小説集「三言」(『古今小説』『警世通言』『醒世恆言』)には「白蛇伝」「杜子春」など日本でも人口に膾炙した作品が多い。この「三言」所収篇について、明治から終戦直後までに翻訳を手掛けた人物は、現時点で二二名が確認出来る。しかし、その中で大学の研究職に在職しない民間の知識人の翻訳は二〇名——全体の九割以上を占めているのである。これら民間翻訳は、白話小説の受容史(ここでは歴代の日本人が中国白話小説をどのように理解し、取り込んでいったのかという受容の歴史)で

も検討されることが極めて少なく、その存在さえも看過されていた。それが斯界の現状である。

そこで筆者は、中国文化の日本受容にまつわる考察の一環として「三言」や「三言」の選集『今古奇観』の民間翻訳に関する事例研究を試みている。これまでの一連の研究では明治・大正時代における翻訳事例を検証しているが、本稿では筆者が発見した近藤總草による『警世通言』卷二(『今古奇観』卷二〇)「莊子休鼓益成大道」(『莊子休鼓益成大道』)の翻訳を中心に、翻訳者や翻訳収録誌の性格、そして近藤總草による翻訳情況についての基礎的考察を行う。これにより、その存在さえも知らなかった旧満洲の邦人による「三言」受容事例を紹介・分析し、これまで看過されていた民間翻訳例の補完を行うことにしたい。

一 「莊子とその妻」の受容史上の特異性

今回筆者が発見した近藤總草(以下「近藤」)による翻訳「莊子とその妻」は、昭和五年(一九三〇)に大連で刊行された邦字雑誌『滿蒙』第一一巻五号に掲載されていたものである。

まず『警世通言』卷二（『今古奇観』卷二〇）の受容史の観点から、加藤による翻訳の位置を確認すると、左掲の通りとなる。（○は翻案作品、△は訓読翻訳、●は民間翻訳、□は大学研究者による現代口語訳である）

- （1）都賀庭鐘「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」（二七四九）^二
- △（2）佐羽淡斎「莊子休鼓盆成大道」（一八一四）^三
- （3）近藤總草「莊子とその妻」（一九三〇）^三
- （4）魚返善雄「莊子の妻」（一九五二）^四
- （5）後藤基巳「莊子休が鉢をたたいて悟りをひらくこと」（一九五八）^五
- （6）辛島 驍「待ちきれぬ妻」（一九五九）^六
- （7）駒田信三「莊子休 盆鼓いて大道を成すこと」（一九六六）^七

このように小論で扱う作品「莊子休鼓盆成大道」（以下「莊子休」の受容は、早くも「三言」が舶来した江戸寛延年間に遡ることができ

る。「莊子休」の日本伝来の時期であるが、明確な年代は判然としな

い。例えば長崎書物改役による『商舶載來書目』（一八〇四）によれば、本作品所収の『警世通言』が寛保三年（一七四三）に、同じく本作が収められた『今古奇観』が享保一六年（一七三一）に渡来し、長崎へ舶来した記録^八が確認できる。ただ『商舶載來書目』の記録以前に日本国内には「三言」所収篇が到来していたものと見られ、伊藤仁斎の日記には天和三年（一六八三）に唐本本屋宇兵衛か

ら『醒世恆言』を借りて読んだとあり、仁斎の長男・東涯^{きやう}についても、『紀聞小牘』卷一三「釈詁隨筆」（宝永二〜四年・一七〇五〜七年）及び卷二五「釈詁録」（宝永七年・一七一〇年）には『名物六帖』の編纂に際して『水滸傳』や『古今小説』から語彙を抄出し、また『紀聞小牘』卷一五「釈詁録」（宝永七年・一七一〇年）にも『拍案驚奇』の抄出が見える^九。また小論で扱う「莊子休」が収録された『警世通言』についても『商舶載來書目』の記載以前から記録が見える。例えば江戸時代中期の儒者・田中大観^{たなかたいかん}が黄檗僧^{おうぼくそう}から唐話を学び白話小説や雑劇などを考証した『大観隨筆』に「嘗觀小説名警世通言」という記述が見られる。このことから『警世通言』は遅くとも一七三六年以前に日本に伝わっていたことが理解出来る。

これら古義学を標榜した儒学者による白話小説の入手や通読の記録が残っている事実からも、「莊子休」をはじめとした「三言」所収篇の受容は、舶来当初から旺盛に行われたものと見られ、それを裏付けるとも言えるのが、寛延二年（一七四九）に出版された都賀庭鐘^{つがてい}の読本『古今奇談英草子』^十（以下『英草子』）の出版であろう。

『英草子』には合計九篇の作品が収録されているが、その内八篇は『警世通言』と『古今小説』所収作品が翻案^{十一}されたものであり、その第四篇に「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」^{十二}が登場する。これは「莊子休」のストーリーをベースにしながら、作品の舞台を天文年間の江戸社会にあてはめた翻案作品である^{十三}。また『通俗古今奇観』は江戸化政年間の漢詩人で商人であった佐羽淡斎^{さばたんざい}が、文化一一年（一八一四）に『通俗古今奇観』と題して『今古奇観』所収の三篇^{十四}①『今古奇観』卷二〇「莊子休鼓盆成大道」、②同書卷

三八「趙縣君喬進黃柑子」、③同書卷七「賣油郎獨占花魁」を翻刻しているが、江戸を舞台に置き換える形で翻案した『英草子』とは異なり、本作は原文をそのまま訓読翻訳している。「通俗古今奇観」による訓読翻訳は、本作の唐話学的成果として重要であるが、その詳細は、別途後考を準備する予定である。

なお、右記一覧を見ると「莊子休」の受容には、大きく二つの段階があることが理解出来よう。それが①明治時代以前の翻案や訓読翻訳としての受容、②戦後からの大学の研究者による翻訳である。

中国思想の専門家である後藤基巳はやや分野が異なるものの、魚返善雄・辛島驍・駒田信二は中国文学・中国語学における当時の第一線の研究者である。このように戦後の翻訳は、いずれも大学の研究者によるいわばアカデミックな立場からの翻訳で占められていることが理解出来よう。

しかし、今回発見された近藤の翻訳は、江戸から明治にかけての唐話学の系統にも、戦後の大学の専門家による翻訳とも異なる、民間翻訳という独自の立ち位置で「莊子休」の翻訳を試みている。

また近藤は、明治以降初めて翻訳された事例であり、かつ現代口語に翻訳された最初の翻訳事例である。そのため本作の受容史はもとより、「三言」所収篇、そして中国古典文学の受容における翻訳層の交代を検討する上で格好の事例研究となる。

以下、小論では近藤による翻訳を考察するが、具体的考察を行う前提として、⑦翻訳者である近藤總草はいかなる人物であったか、④掲載された邦字雑誌『滿蒙』についても検討を行うべきであろう。しかし小論では、これらの疑問を詳細に答えるだけの紙幅を持たな

い。そのため、ここでは翻訳者の近藤總草と「莊子休」の翻訳情況に限定して分析し、掲載された邦字雑誌『滿蒙』や「莊子休」以外の翻訳情況については、別稿に委ねることとしたい。

二・謎多き翻訳者・近藤總草について

本章では翻訳者である近藤總草について検討する。先に結論を述べておくと、彼については殆ど判っていない。それは近藤が主に活躍した舞台が旧満洲国の旧制学校であったためである。この種の旧外地における学校関係資料の大半は残されておらず、各学校の教職員名簿など基礎史料となりうる手掛かりも殆ど現存していないからである。

そのため、筆者は当翻訳を発見後、数年間をかけて翻訳者について資料収集作業を行い、その概要を把握できるようになった。以下その内容を紹介することとしたい。

〔写真一〕 訳者である近藤總草の事跡であるが、まず手掛かりとなるのは、近藤總草が作詞した奉天朝日高等女学校校歌（橋本國彦作曲）である。奉天朝日高等女学校校歌の楽譜（二×三〇センチ）は、筆者が金沢市内の古書肆で発見したものであるが、本楽譜裏には近藤總草が作詞した校歌が印刷されていた。

校歌が制定された時期は、学校設立の時期とほぼ同時期であると想像されるが、この奉天朝日高等女学校は、一九三五年五月三十一日付け『官報』にある關東局告示第三八號に「奉天朝日高等女学校ヲ在外指定學校ト指定」とある。また梅野正信氏によると、奉天朝日

高等女學校校友會雜誌『あけぼの』（三號、一九三八）に校歌解説が掲載^{〔十三〕}されているという。恐らく校歌制定は一九三五年〜三八年の時期と思われる、満洲国成立（一九三二）以後であることがここから理解出来るであろう。

このように、近藤の活躍時期は校歌作詞から絞り込むことが出来るものの、奉天朝日高等女学校の校歌を根拠として、近藤が満洲国在住の人物であるとは言えない。しかし校歌発見後に、筆者は近藤總草が一冊の書籍を内地で刊行していたことを発見し、かつ、その現本を入手することが出来た。それが近藤總草著『滿洲支那傳説物語』（越後屋書房、一九四一）である。そして本書の「前書き」から彼の職務内容と、翻訳の経緯を知る事が出来た。

『滿洲支那傳説物語』は稀覯本である。国内の大学では唯一東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室のみに収蔵され、国公立図書館に範囲を広げても国立国会図書館と大阪府立中央図書館、佐賀県立図書館、宮城県図書館の四図書館、そして海外では天津図書館日本文庫にだけ所蔵されているだけである。

〔写真二〕 神田の古書肆から入手した該書奥付をみると、発行者（遠藤春吉 東京市小石川區茗荷谷五六・印刷者（田中舜二 東京市神田區西神田一ノ九）・發給元（日本出版配給株式會社 東京市神田區淡路町二ノ九）の所在地は何れも東京市（当時）にある。しかし、彼による前書きを見ると、著者である近藤は一貫して外地にいたことが判る。

それには、

祖國の少年少女諸君——

滿洲が日本の生命線であり、支那が大和民族への新天地であることは、今更こと新しく申し述べべきことでもありませんが、最近愈々此の認識が母國に居られる皆さんの間に深くなつて来たことはまことに嬉しいことでもあります。…（中略）…私はこの外に尚こちらの民間に傳つてゐる美しい物語を蒐めて、これを皆さんにお送りしたいと、かね／＼考へてみました。今私はこの希望がこゝに一巻の書物にまとまつて、遙かに母國に居られる皆さんに送ることが出来るやうになつたことを心から喜ぶとともに、深く光榮に感じて居るものであります。

在滿支の少年少女諸君——

皆さんは遠く祖國を離れ、國防の第一線にあつて、日毎々々に緊張した生活を營んで居られるのであります。…（中略）…皆さんが讀まれる多くの本は、又皆さんが大人の方から聞かれる多くの物語は、遠くはなれた母國、時にはまだ見たこともない國のお話であります。遠い母國をこれ等の物語によつて、空の彼方に偲ぶことも結構なことでもあります。がそれと同時に①私ども育ちつゝ、あるこの土地にも美しい物語、面白いお話があるならば、それを皆さんに知つて戴きたいと思つておりました。かうした目的で、私は過去十年間、或ひは人に聞いたり、或ひは實際に調べたり、或ひは外の本で見たりした物語を、其の折にふれて書き綴つて置きました。そして其の都度②これを國語教育・滿蒙・愛兒と學校・童心行・協和などの雑誌に發表したり、③

(一)

うらゝかに朝日は昇る
朝日こそ皇國の標
かぎりなき君が御稜威に
我等いま安けく學ぶ
名に負へる 朝日 朝日
榮あれ 榮あれ わが學び舎

(二)

目もはるに廣野はつゞく
廣野こそ希望の相
はてしなき前途めざして
我等いま瞳みて學ぶ
名に負へる 朝日 朝日
榮あれ 榮あれ わが學び舎

(三)

高らかに訓はかゝる
訓こそ心の鑑
たゆみなき磨き重ねて
我等いま勤み學ぶ
名に負へる 朝日 朝日
榮あれ 榮あれ わが學び舎

〔写真一〕 近藤總草作奉天朝日高等女學校校歌



〔写真二〕 近藤總草『滿洲支那傳説物語』

奉天放送局のマイクロフォンを通じて発表したりして来ました。今それ等を取りあつめ尙それに未だ発表してゐないものをも十數篇加へまして、一巻としてこれを皆さんへの贈物とするものであります。…(中略)…皆さんは第一線に立つ大陸同胞の雄々しい後継者であります。若し皆さんが、此の一書によつて、大陸の土に郷土としての親しみが幾分でも湧き出ましたならば、私の喜びはこれにこしたものはないのであります。

昭和十六年六月

齊齊哈爾にて 著 者 識 す

とある。傍線部①にある通り、近藤は本書刊行以前から過去一〇年間の歳月をかけて現地の伝説や物語を記録していたとあり、傍線部②では近藤自身も蒐集した物語を各雑誌に発表していたとある。彼が記した雑誌であるが『愛兒と學校』の詳細は不明、『童心行』は満洲の同人雑誌であることが判明したが、現存資料がほぼ存在しない^{〔十四〕}。『協和』は一九二七年創刊の満鐵社員會の機関誌であり、満洲各地二万の社員を有する国策会社であったことから満洲では強い影響力を持つ雑誌である^{〔十五〕}。近藤は本誌において少なくとも四篇の作品を掲載^{〔十六〕}しており、近藤が南満洲鉄道株式会社(満鐵)の社員であった可能性が高いことがうかがえる。

〔写真三〕なお、旧外地で出版された雑誌について言及しておく。旧外地で出版された雑誌は概して保存状態が劣悪であり、彼が前書きで言及した活動に関するすべての裏付けを取るのには現時点では困難であり、本誌も若干の先行研究^{〔十七〕}がある程度である。(満洲国の

文化や文学の研究^{〔十八〕}に関する著作は見られるものの、特定の雑誌に関する先行研究は乏しく、『華文大阪毎日』と『文友』^{〔十九〕}『芸文』^{〔二十〕}『北辰』^{〔二十一〕}『満洲國語』^{〔二十二〕}『麒麟』^{〔二十三〕}『満洲浪漫』^{〔二十四〕}『北窓』^{〔二十五〕}など一部の雑誌に関する小規模な考察が散見するに過ぎない)ただ在京の育英書院から刊行された国語教育研究会の機関誌『國語教育』^{〔二十六〕}は、現存する資料が多く、『國語教育』(二五卷七號、一九三〇年七月)には、近藤總草「支那傳説 尽きぬ泉」が掲載されていることが確認出来た。この『國語教育』の掲載時期と、『満洲支那傳説物語』の前書きから推測するに、近藤による旧外地での物語収集は、一九三〇年以前から行われていたと考えられる。

なお、ここで注意すべき点の一つある。近藤の「支那傳説 尽きぬ泉」が『國語教育』誌上に掲載された時期は満洲事変(一九三一年九月)以前であり、彼は満洲事変以前から収集作業を行っていた事ここから明らかとなる。そのため彼は満洲国成立以前から日本租借地であった関東州(恐らくは一九〇六年九月以後の民政移管した関東都督府もしくは一九一九年四月の関東庁への改組後の関東州)の時期から現地の学校教育に携わり、物語の蒐集記録を行っていたものと推測されるのである。

なお、近藤による前書きには若干不明点も残されている。例えば近藤は放送局で自らが収集した物語を発表したとある。当時満洲国ではラジオによる学校放送と満洲電報(満洲電信電話株式会社)によるラジオ放送^{〔二十七〕}があったが、傍線部③に「奉天放送局のマイクロフォンを通じて発表したりして来ました」とあるため、満洲電報奉天放送局から満洲全土にラジオ放送したと思われる。また先行研



支那傳説 盡きぬ泉

近藤總草

山東省の濟南から山東鐵道に乗つて、青島に向ふ人は、三時間あまりで張店といふ驛を通ることに気がつくでせう。若しこの張店で下車し、支線に乗換へて、南の方へ一時間ほど走りますと、この支線の終驛なる博山といふ町に着きます。

さほど大きい町とも云はれませんが、硝子や陶器類が出来るのと、又附近からは澤山の石炭が産出するのとで有名であります。

この町の前は廣い山東平野で、農作物のよみのある畑が、どこまでも遠く続いてゐますが、後は近く一帯に丘陵が連つてゐます。そして此の丘陵の方から一筋の川が流れて来て、此

の町の間を縫ふやうに通り、附近の畑の作物を養ひながら、果ては遠く渤海に流れ込んで居ります。土地の人はこの川を孝婦河と呼んでゐます。誰でも『孝婦河』といふ此の名を聞くほどの人は、皆そこには何か孝婦についての物語があるのだらうと想像することです。

今から約千二百年程も前のある夏のことです。

その年はどうしたわけか、毎日々々ひでりが續いて、少しも雨が降りません。春から一生懸命になつて、農夫達が世話をしやつと大きくなつた畠の作物も、此の頃ではすっかり元氣がな

くなつてしまひました。丁度私達が幾日も幾日も何も食へずにあつたのと同じですから無理もありません。

農夫達は自分の畠へ出て、元氣のなくなつた作物を眺めては、皆心配してゐます。

お寺や神様には、勿論みなお願いしました。『どうぞ雨を降らせて下さいませうやうに。』

夜遅くたいまつが向ふの山を續いて登つて行くのが見えるのも、此の頃では毎晩のやうです。天の神様にお願ひするために登る雨乞の行列です。

然しやはり一粒の雨も降つて参りません。

畠の作物はたうとう枯れ出しました。一本、二本、三本……枯れて行く数は次第に増して行きます。此の調子で進むならば、今年の秋は收穫が全くなくなつてしまふであらうと心配せずには居られませんでした。

けれどもただ心配するだけで、どうすることも出来ません。今は井戸の水さへ枯れて、飲料水にも不自由する程になつてしまひました。

大人達が毎日心配してゐますと、その心配はいつしか無邪氣な子供達にもよくわかるやうになりました。

夕やけ
小やけ
あした

〔写真三〕近藤總草「支那小説 盡きぬ泉」(『國語教育』)

究によると満洲電電によるラジオ放送では児童向け放送が充実しており、例えば一九三九年では毎月平均一〇回の児童向け番組が放送され、その番組制作は「新京、奉天、ハルビンそして大連という四つの放送局に集中していた」^{二三五}とあり、近藤は奉天での番組制作の一環として彼の採話が紹介されたと推定できるが、その放送番組に関する詳細は不明である。

またもう一つの疑問が、雑誌『滿蒙』所収作品に関する疑問である。傍線部②で近藤は雑誌『滿蒙』に発表し、それらの作品を本著に収録したとある。それを裏付けるように『滿蒙』には、

- ①近藤總草「莊子とその妻」(『滿蒙』一一年五號、一九三〇)
- ②近藤總草「因果はめぐる」(『滿蒙』一一年六號、一九三〇)
- ③近藤總草「煉炭美人局」(『滿蒙』一一年七號、一九三〇)
- ④近藤總草「ある殺人事件」(『滿蒙』一一年一號、一九三〇)

の四作品が確認出来た。しかしなぜか彼の著作『滿洲支那傳説物語』には『滿蒙』掲載の作品が何れも収録されておらず、彼の前書きによる説明と相矛盾する。これは前掲した近藤の前書きの傍線部①にある「私ども育ちつ、あるこの土地にも美しい物語、面白いお話があるならば、それを皆さんに知って戴きたい」という主旨から、収録作品は満洲で取材したものを優先したとも考えられる^{二三九}。

また『滿洲支那傳説物語』が児童向けに編纂された書籍である一方、『滿蒙』掲載の四作品(①『警世通言』卷二、②『古今小説』卷二七、③『初刻拍案驚奇』卷一八、④『初刻拍案驚奇』卷一一)は、『三言』

及び明代短篇白話小説集で凌濛初編『初刻拍案驚奇』の翻訳であり、かつその作品内容が児童向けの書籍には相応しくなかった可能性が考えられるのである。

以上、翻訳者の近藤總草について、現在までに判明した内容を紹介した。『滿洲支那傳説物語』の前書きにも見える通り、彼は関東州や満洲国の旧制女学校の教員であり、旧外地にある各地の学校に赴任した関係から、長年現地の物語の収集を行うことが出来たと推測できる。そして「莊子休」の翻訳も、これら収集作業の一環として「三言」所収篇が近藤の目にとまった可能性が考えられるが、その詳細は未解明のままである。今後の継続的研究によって新たな発見があった場合には、後日別稿で紹介する予定である。

それでは、この旧外地に赴任した一教員による翻訳は、いかなるものであったのか。その詳細を分析することとしたい。

二 近藤總草による翻訳「莊子とその妻」について

近藤が翻訳した「莊子休鼓盆成大道」は、明代短篇白話小説の中でも特異な作品である。その特異性は何かというと、作品形式と場面設定の二点からである。

「三言」所収篇の一般的な形式は、「入話(rùhuà)」という作品本題と関連した小話と、作品の本題となる「正文(zhèngwén)」という二段構成が一般的^{二三七}である。しかし、本作品では「入話」は備えられておらず、「正文」のみで構成されているという珍しいスタイルを取っている。また作品の場面設定も特異である。そのあらすじは次

の通りである。

莊子が道で新しい墳を扇いでいる婦人を見つけ、わけを問うと、亡夫が墳の土が乾いたら再嫁してもよいと遺言したから、という。莊子が道術で乾かしてやると、婦人は礼を言い、欣然として立ち去った。このことを家に帰って妻の田氏に話すと、田氏はその婦人の薄情を責めた。莊子が、自分が死ぬば田氏とて同じだろうと言うと、田氏は怒って否定した。その後、まもなく莊子は病死した。その七日目に楚の王孫と称する美青年が莊子を訪ねて来たが、莊子に会えぬまま、家に逗留した。田氏は青年の美貌に惹かれ、夫に迎えることにし、式を挙げ床入りしたとき、王孫が急病にかかった。救う道は、生人か死後四十九日以内の人間の脳みそだけと知ると、田氏は死後二十日余りの莊子の棺を叩き破った。中から莊子が起き上がって出てきた。王孫は消えていた。すべて莊子の分身隠形の法のなせるわざであった。田氏は自縊して果てた。莊子は結婚の宴席の残りの酒を飲み、瓦盆を打って田氏のあさはかな言行を歌った。^{〔三十一〕}

このように本作品は莊子が活躍した戦国時代に設定されている。「三言」所収篇では通常、宋元代や明代の作品として設定されることが多いが、その話柄は『莊子』逍遙遊第一、及び同書至樂第一八所収の「田氏扇墳」と「楚王孫来用」の故事から取材し、小説化された作品であるため、当初から古代を前提にした時代設定であることが判る。ただ戦国時代当時の古文（文言）をそのまま使用すると読解

に支障を来す。そのため本作品では古代の風格を残すべく文言体的な表現を残しながらも、通俗小説の読者の理解に資するべく白話的表現や白話語彙も盛り込んでいる。このように「莊子休」は、一つの作品の中に文言と白話が混在しており、翻訳の際には白話のみならず文言の知識が必要であり、双方の語学的知識がなければ翻訳が難しい作品と言うことが出来るのである。

それでは本作の原文と「莊子休」の定訳である駒田信二訳（一九七〇）^{〔三十二〕}を掲げた上で、近藤訳の翻訳状況について確認したい。

なお原文の傍線にある点線は、近藤訳で省略された箇所であり、近藤訳の傍線にある点線は、原文にはない翻訳者による加筆を意味する。なお波線は翻訳の際に改変が認められる箇所を示している（以下同じ）。

まず作品冒頭にある主人公の説明の箇所であるが、

話說周末時、有一高賢、姓莊、名周、字子休、宋國蒙邑人也。曾仕周爲漆園吏。^{〔1〕}師事一個大聖人、是道教之祖、姓李名耳。

字伯陽。伯陽生而白髮、人都呼爲老子。

莊生常晝寢、夢爲蝴蝶、栩栩然於園林花草之間、其意甚適。醒來時、尚覺臂膊如兩翅飛動、心甚異之、以後不時有此夢。^{〔2〕}

莊生一日在老子座間講『易』之暇、將此夢訴之於師。師是個大聖人、曉得三生來歷、向莊生指出夙世因由、那莊生原是混沌初分時一個白蝴蝶。天一生水、二生木、木榮花茂。那白蝴蝶採百花之精、奪日月之秀、得了氣候、長生不死、翅如車輪。後游於瑤池、偷

採蟠桃花蕊、被王母娘娘位下守花的青鸞啄死。其神不散、托生於世、做了莊周。因他根器不凡、道心堅固、師事老子、學清淨無爲之教。今日被老子點破了前生、如夢初醒。**(3) 自覺兩腋風生、有栩栩然蝴蝶之意。把世情榮枯得喪、看做行雲流水、一絲不掛。**老子知他心下大悟、把《道德》五千字的秘訣、傾囊而授。莊生默默誦習脩煉、遂能分身隱形、出神變化。從此棄了漆園吏的前程、辭別老子、周游訪道。他雖宗清淨之教、原不絕夫婦之倫、一連娶過三遍妻房。第一妻、得疾夭亡。第二妻、有過被出。如今說的是第三妻、姓田、乃田齊族中之女。

(さて周の末ごろ、姓は莊、名は周、字は子休という、世俗を超越した賢人がいた。宋の国の蒙(河南省商邱付近)の地の人である。周の王室に仕えて漆園の小役人になったことがあり、また、**(1) 一人の偉大な人に師事したことがある。その人は道教の始祖で、姓は李、名は耳、字は伯陽という。伯陽は生まれたときから白髪だったので、人々はみな「老子」と呼んだ。**

莊生はあるとき昼寝をして、夢の中で蝴蝶になり、ひらひらと木や草花のあいだを飛びまわって、まことにたのしかった。眼がさめてからも腕が羽のように動いている気がして、不思議なことだと思っただ、それからはいつも同じ夢を見た。

(2) 莊生はある日、老子のところで「易」の講義を受けたあとで、この夢のことを師に話した。老子は偉大な聖人で、三生(過去・現在・未来)の来歴を知っているので、莊生に彼の前世の因縁を説きあかした。すなわち、莊生という男は天地開闢のはじめには一匹の白い蝴蝶だったのである。やがて天から水が生じ、水が木を生じて、木が繁り花が咲くと、その白い蝴蝶は百花の精を吸い、日月の恵みを受け、氣象を身につけて不老不死となり、羽は車輪のようになった。その後、瑤池(神仙の住む地)へ行って蟠桃の蕊を盗

んだため、王母娘娘さま(西王母)の花の番人の青鸞につつき殺されたが、その魂は消えず、この世に生まれ変わって莊周になったとのこと。非凡な生まれなので、道を求める心が堅く、老子に師事して清淨無爲の教を学んでいたのだが、今老子に前世のことを説き聞かされて夢からさめた思いがし、**(3) 両腋に風のおこるのを覚えて、ひらひらと飛びまわる蝴蝶のような心地になり、この世の榮枯や得失を、雲や水のように見なし、いささかも心にかけなくなつた。**

老子は彼が悟りを開いたことを知って、『道德経』五千言の奥義をあますところなく教へ授けた。莊生は黙々と習ひ修めて、ついに分身隱形(姿を消して幾人もの者に身をかえる術)、変幻自在の法を会得するに至つた。それから漆園の役人としての前途を捨て、老子に別れを告げて、道を求めて各地をめぐり歩いた。彼は清淨の教を旨としたが、夫婦の道は絶つことなく、つづけて三度妻を娶つた。最初の妻は病気で早死にし、二度目の妻はあやまちを出された。今からお話するのは三番目の妻で、姓は田といい、田齊(齊王の田氏)の一族の娘である) 二三三

この箇所を近藤はこのように翻訳している。

週末の頃、宋の國は蒙邑の人で、姓を莊、名を周、字を子休といふ一人の賢人があつた。——これこそ後の莊子であるが、はじめは周に仕へて漆園の小役人となつた。その後、**(1) 生れながらにして白髪であるために人から老子と呼ばれた者に師事した。**

莊子は晝寝をすると、いつも胡蝶となつて、園林草花の間をひらひら遊び廻るのを夢見た。**(2) 一日此夢を彼の師老子に話**

すと、老子は道教の主と崇められるだけあつて賢人であるから、その三生の來歴を曉ることが出來たので、莊子に向つて云つた。

『君はもと天地開闢の時、一つの白い胡蝶であつたが百花の精を採り、日月の秀を奪ひ、陰陽の氣をうけて、長生不老、翅は車輪の如く大であつたけれども、天上の瑤池に遊んで、蟠桃の花蕊を偷み採り、西王母の家來で花番である青鸞のために食はれてしまつたので、生をこの世に托してゐる者である。』

莊子は老子からその前身を教へられると、夢から醒めた様な心地がし、(3)その後一意修業を積んで、すっかり悟をひらき、老子から道徳經五千字の秘訣を盡く受けられた。莊子は益々勉強して道徳經五千字を全部暗誦し、遂に分身忍術、出身變化の法を會得した。彼はかうして清淨な教を奉じてはゐるものの、夫婦の倫は絶つことが出來ずして、妻を換へること三回にまで及んだ。最初の妻は病死し、次のは過失があつたので離縁し、三度目に娶つたのが今の妻、田氏である。(二十四)

近藤訳全体に関する傾向であるが、翻訳の際に原文内容の若干の要約が行われていることが確認出来る。

例えば駒田信二による「莊子休」の翻訳(全訳)では一五〇六六字の文字数があるが、『滿蒙』の誌面に掲載された近藤の翻訳は七六五〇字に過ぎない。つまり平凡社の訳文の五〇・八%の文字数に過ぎないことがうかがえる。『滿蒙』は満鉄の機関誌であり、商業誌ではない。それゆえ地味な明代白話小説の翻訳が掲載されたのである。それでも誌面の都合から頁数の制約を受けたものと思われる。

これは学術的な翻訳とは異なる民間翻訳の事情の一つであり、本稿でもこれらの事情は留意すべきと考えている。

このような事情で近藤訳では一部の原文が省略され翻訳されているが、近藤訳の場合この省略の方法が、他の翻訳と大きく異なる。

翻訳の際、その省略方法には大きく二つが存在する。その第一は特定の段落や場面を丸ごと省略する方法、そして第二の方法には、原文の中から文脈に影響を与えない箇所や、冗長と思われる表現を採り出し一つ一つ削除してゆくという方法であり、その手間は後者が遙かに多い。

そのためか「三言」所収篇の民間翻訳の他の事例を見ると、省略方法は前者を選択した事例が圧倒的である。近藤も作品の冒頭にある挿入詩の箇所を割愛しており、これは彼の翻訳にも確認出来るが、近藤訳はそれだけではない。近藤訳の場合には、段落を一括割して愛するよりも、大きな手間がかかる後者の省略方法を入念に行っている点が注目されるのである。

(1) 近藤訳における翻訳省略の特徴

近藤による省略情況の一例を右の網掛部(1)から紹介したい。該当箇所は莊子が師事した老子の紹介場面であるが、老子は本作品に於いて重要な登場人物ではない。そのため近藤訳では老子の紹介に関する部分の大半を省略し、最小限にとどめことが看取できる。原文には「①師事一個大聖人、②是道教之祖、③姓李名耳、④字伯陽。⑤伯陽生而白髮、人都呼爲老子」とあり、老子に関係する情報

として①莊子は老子に師事したこと。②老子は道教の始祖であること。③姓は「李」で名は「耳」であること、④字（あざな）は「伯陽」であること。⑤伯陽は生まれたときから白髪だったので人々はみな「老子」と呼んだことが説明されている。しかし作品のストーリー上、老子の字や本名という情報はさして重要な意味を持たない。そのため近藤は「生れながらにして白髪であるために人から老子と呼ばれた者に師事した」と、原文にある情報の中から①⑤のみを選び出し、更に原文が二文構成となっている原文を、翻訳では一文に統合している。

もう一つ、より広い範囲での近藤訳での状況を確認したい。網掛部（2）にある「①莊生一日在老子座間講『易』之暇、②將此夢訴之於師。③師是個大聖人、曉得三生來歷、④向莊生指出夙世因由、那⑤莊生原是混沌初分時一個白蝴蝶。⑥天一生水、二生木、木榮花茂。那白蝴蝶採百花之精、⑦奪日月之秀、得了氣候、長生不死、翅如車輪。⑧後游於瑤池、偷採蟠桃花蕊、被王母娘娘位下守花的青鸞啄死。⑨其神不散、托生於世、做了莊周。」の箇所は、このようなプロットで構成されている。①莊生は老子のもとで「易」の講義を受けた。②莊生は講義後に自分が見た夢を師に話した。③老子は過去・現在・未来の來歴を知っていた。④そのため老子は、莊生に彼の前世の因縁を説き明かしたというものである。そして老子の解説に移るが、これは間接話法でこのように記されている。⑤莊生は原初一匹の白い蝴蝶であった。⑥天から水が、水から木が生じ、木は繁り花が咲くと、蝴蝶は百花の精を吸った。⑦日月の恵みを受け、氣を會得した胡蝶は不老不死となり、羽は車輪のようになった。⑧その後、

瑤池へ行って蟠桃の蕊を盗んだため、王母娘娘の花の番人の青鸞に殺された。⑨その魂が生まれ変わって莊周になった。という莊子の出生譚を、老子の口を借りて詳述している。

この出生譚は「莊子休」の作品後半で語られる死亡した莊子が蘇る、という超自然的な現象の伏線として設定されており、ストーリーの上では不可欠な存在である。ただ、その伏線は原文ほど大がかりな説明を行う必要はない。そのため近藤は、

②一日此夢を彼の師老子に話すと、③老子は道教の主と崇められるだけあつて賢人であるから、その三生の來歴を曉る事が出來たので、莊子に向つて云つた。

『⑤君はもと天地開闢の時、一つの白い胡蝶であつたが⑥百花の精を採り、⑦日月の秀を奪ひ、陰陽の氣をうけて、長生不老、翅は車輪の如く大であつたけれども、⑧天上の瑤池に遊んで、蟠桃の花蕊を偷み採り、西王母の家來で花番である青鸞のためには食はれてしまつたので、⑨生をこの世に托してゐる者である。』

とプロットを維持しながらも、物語の進行上不要と思われる箇所を逐次削除しているのである。

まず⑤⑨にわたる老子の発言をそのまま直接話法に変更し、文脈上の明瞭化を図っているほか、①にある老子と莊子の会話が行われる時間と舞台設定と、④にある莊生に彼の前世の因縁を説き明かす件は、傍線部③と内容が重複するため省略している。そのほかにも、例えば傍線部⑥では「天から水が、水から木が生じ、木が繁り、花

が咲くと、蝴蝶は百花の精を吸った」という箇所も「百花の精を採り」と単純化している。このように物語進行上の重要性に則つて要不要を選別し、必要最小限の情報に絞り込みが随所で行われている。この手法であるが、削除する部分の内容も十分理解していないと取捨選択は不可能である。そのため、この種の省略は高度な原文の理解力が必要となるのである。

また近藤訳の特徴として、翻訳者である近藤の学識の高さが随所で窺える。例えば傍線部⑦の波線部分を紹介したい。原文の「得了氣候 (phou)」であるが「氣候」は①氣候、②時節、③動向・情勢、④局面、⑤景気等の意味があり、ここでは「不成氣候」に類する「氣候」であり、「天地の氣を得る」という氣の効験を意味する。この「氣候」は日本で馴染みの薄いニュアンスであり、定訳の駒田信二訳でも「氣象を身につけて」と意味が不明確であるが、近藤訳では「陰陽の氣をうけて」と、より読者に判りやすく翻訳している。

また近藤の翻訳では、原文箇所の割愛の他に内容的要約も見られる。例えば網掛部(3)「自覺兩腋風生、有栩栩然蝴蝶之意。把世情榮枯得喪、看做行雲流水、一絲不掛」は、莊子が悟りを開く場面であるが、原義では、莊子は両腋に風の起こるのを感じ、ひらひらと飛びまわる蝴蝶のような心地になった。そして現世の榮枯得失を、雲や水のように見なし、少しも心につけなくなつたという内容である。ここで近藤は「その後一意修業を積んで、すつかり悟をひらき」としている。原文には莊子が修行した経緯は一切述べられていないので内容の飛躍を免れないが、(莊子が)現世の榮枯得失を、雲や水のように見なし、少しも心につけなくなつた状態に至る様子を「悟

りをひらき」と的確に約言している。

このような要約でも原文の内容を充分に把握する必要があった。そのため近藤の翻訳での省略と要約の過程では、原文の正確な把握が必須となる。その点において近藤訳は極めて正確に原文の内容を理解しており、語釈上で問題になる箇所や誤訳が、他の同時期の翻訳——例えば佐藤春夫訳(一九二二)^{三十五}、鈴木真海訳(一九二五)^{三十六}、井上紅梅訳(一九三〇)^{三十七}、榛原茂樹訳(一九三〇)^{三十八}に比べて極めて少ない。

(2) 近藤訳における翻訳の特徴

以上、近藤訳における原文の省略情況から、彼の原文理解について述べたが、次に、様々な文体でどのような翻訳が行われているかを把握するため、対話文の多い箇所をピックアップして検討することとしたい。なお原文にある四角枠で囲まれた語句は、翻訳上重要となる箇所を意味する。

老蒼頭收了二十兩銀子、回覆楚王孫。楚王孫只得順從。老蒼頭回覆了婆娘、那婆娘當時歡天喜地、把孝服除下、重勾粉面、再點朱唇、穿了一套新鮮色衣。(1) 叫蒼頭顧喚近山莊客、扛擡莊生尸柩、停於後面破屋之內。打掃草堂、準備做合婚筵席。有詩爲證、

俊俏孤孀別樣嬌 王孫有意更相挑。
一鞍一馬誰人語 今夜思將快婿招。

是夜、那婆娘收拾香房、(2)草堂内擺得燈燭輝煌。楚王孫簪纓袍服、田氏錦襖繡裙、雙雙立於花燭之下。一對男女、如玉琢金裝、美不可說。(3)交拜已畢、千恩萬愛的、攜手入於洞房。喫了合巹杯、正欲上牀解衣就寢。忽然楚王孫眉頭雙皺、寸步難移、登時倒於地下、雙手磨胸、只叫心痛難忍。田氏心愛王孫、顧不得新婚廉恥、近前抱住、替他撫摩、問其所以。王孫痛極不語、口吐涎沫、奄奄欲絕。老蒼頭慌做一堆。田氏道「王孫平日曾有此症候否？」老蒼頭代言「此症平日常有。或一二年發一次、無藥可治。只有一物、用之立效。」田氏急問「所用何物。」

老蒼頭道「太醫傳一奇方、必得生人腦髓熱酒吞之、其痛立止。平日此病舉發、老殿下奏過楚王、撥一名死囚來、縛而殺之、取其腦髓。今山中如何可得。(4)其命合休矣。」田氏道「生人腦髓、必不可致。第不知死人的可用得麼。」老蒼頭道「太醫說、凡死未滿四十九日者、其腦尚未乾枯、亦可取用。」田氏道「吾夫死方二十餘日、(5)何不斷棺而取之。」老蒼頭道「只怕娘子不肯。」田氏道「我與王孫成其夫婦、婦人以身事夫、(6)自身尚且不惜、何有於將朽之骨乎。」

即命老蒼頭伏侍王孫、自己尋了砍柴板斧。(7)右手提斧、左手攔燈、往後邊破屋中、將燈放於棺蓋之上。覷定棺頭、雙手舉斧、用力劈去。婦人家氣力單微、如何劈得棺開。有個緣故、那莊周是達生之人、不肯厚斂。桐棺三寸、一斧就劈去了一塊木頭。再一斧去、棺蓋便裂開了。只見莊生從棺內歎口氣、推開棺蓋、挺身坐起。田氏雖然心狠、終是女流。(8)麻得頭軟筋麻、心頭亂跳、斧頭不覺墜地。

老僕は二十兩の銀子を受け取つて、話を楚の貴公子につたえた。楚の貴公子もようやく承知し、老僕はそれを女につたえた。女はたちまち有頂天になり、喪服

をかなくり捨ててふたたび白粉をぬり口紅をつけ、あざやかな色模様のきものに着かえると、(1)老僕に近くの作男たちを呼んでこさせて、莊生の棺桶をかつき出して裏のあばらやの中に置かせ、草堂を掃除して婚禮の宴席の用意をした。これを歌でいえば、

あだな後家さん色めけば
相手の公子も気負い立つ
鞍は一つと言つたも忘れ
胸をさめかす二つ目の鞍

その夜、女は自分の部屋をとり片づけ、(2)草堂にあかあかとあかりをともした。楚の貴公子は冠に礼服、田氏は錦の襖に刺繡の裙、並んで花やかなともし火の下に立つと、一對の男女は、玉や金で飾つたことく、いいよのないほと美しい。(3)儀式が終わると、二人は仲むつまじく手を取りあつて寝間へはいり、床杯をかわした。

いよいよ床入りで、きものをぬいで寝ようとしたとき、急に、楚の貴公子は眉をしかめ、一歩もうごけなくなつて、ぼったり倒れ、両手で胸をさすりながら、ただ「痛くてがまんができない」というばかり。田氏は貴公子いとしさに新婚のはずかしさも忘れて、かけ寄つて抱きかかえ、さすつてやりながらわけをたずねたが、貴公子は痛みがひどくてもいえず、口からよだれを出して、息も絶えんばかりにあえいでいる。老僕もあわててかけつけてきた。

「あなたは、いつもこういう病気がおありですの」と田氏がいうと、老僕が代わつて「この病気はいつもおこるのですが、一二年に一回くらいでしょうか。なおす薬はありませんが、一つだけ、すぐ効くものがあるのです」

田氏はせきこんでたずねた。「それは何なの。」

「侍医さまが教えてくださった珍しい処方で、生きた人間の脳味噌にかきるのですが、それを熱い酒で飲むと、痛みがびたりと止まるのです。ふだんこの病気が

おこると、大旦那さまが楚王さまにお願いなさって、死刑囚を一人もらってきて、締め殺してその脳味噌を取るのです。しかし今は山の中です。でも手にはいりません。(4) 「これまでで(一)寿命なのではないか」「生きた人間の脳味噌は、とても手に入らないわね。だけど死んだ人間のは使えないの。」「侍医さまのお話では、死んでも四十九日までなら脳はまだひからびていないから使えるそうです」「わたしの夫は死んでから二十日あまりよ。(5) 「どうしてお棺をこわして取らないの。」「あなたが承知なさらないだろうと思ひまして」「わたしは若さまと夫婦になったのよ。女は身を以て夫に仕えるもの。(6) 自分の身体だつて惜しくないのに、朽ちかけた骨なんか惜しむのですか」

田氏はそういうと、老僕に貴公子の世話をたのみ、(7) 自分は薪割りの手斧をさがして、右手に手斧をさげ、左手にあかりを持って裏のあばらやへはいつて行き、燭台を棺の蓋の上に置くと、両袖をたくし上げ、両手で斧を持って、棺の先をぬらいさだめ、齒をくいしばり力をこめてえい、つと打ちおろした。

女の人は力が弱くて、とても棺を打ち破ることなどできないものだが、うまい具合に、かの莊周は生死を達観した人で棺は厚くしてはいかん、桐の三寸板の棺でよいといいつけたので、一斧で板は割れ、つづく幾斧かで棺の蓋は開いてしまつた。

女がふうふうと喘いでいると、莊生が棺の中でほつと溜息をつき、棺の蓋をおしあけて、すつと立ち上がった。田氏は心がたけだけしいとはいつても、やはり女。(8) びつくりして身はちぢみ上がり胸はどきどきして、思わず斧をとり落とした。

三十九

この箇所を近藤はこのように翻訳している。

老僕がこの旨を王孫に告げると、王孫は仕方なく承諾するこ
とにした。老僕がこの返事をもたらすと、田氏は大變喜んで、(1)

小作人に棺を後の空いた建物の中に運ばせた。この夜、(2) 家の中は燈火も華やかに輝き、田氏は錦襖袴をつけて、王孫は簪纓に袍服といふでたちで、(3) 祝言の式も滞りなく済んだ。二人は洞房に入り、盃事もすんで、丁度牀に上らうとする時、王孫は突然眉をしかめて、只苦しいと言ふのみで、寸歩も動けない様になつた。田氏は羞かしさも忘れて、王孫を我が懐に抱き込む様にして、そのわけを尋ねた。けれども王孫は痛さの餘り何事も語らないので、例の老僕を呼入れて聞いた。

『私の主人は是が持病です。この持病が起つたら、薬では駄目でございしますが、ただ一つ立どころに效くものがございます。』
『それは何ですか。』

『大醫の奇妙な處方ですが、生きた人の脳味噌をとつて熱い酒と一緒に飲めば、痛みはすぐ止りますので、平生この病氣が起りますと、父君は楚主に申し上げ、死刑囚を殺してその脳味噌を取つて居られます。然し今はこんな山の中の事ですから、そんなものは得られませんし、(4) もうこれまでです。』

『死人の脳味噌では駄目かしら。』

『大醫の申されるには、死人でもまだ四十九日経たないで、脳の乾かないものは、役に立つさうです。』

『私の先夫は死んでまだ二十日餘りにしかならぬが、(5) あの棺を開いて脳味噌を取つてはどうでせう。』

『それは奥様が御承諾になりますまい。』

『王孫様と夫婦になれるなら、(6) 私の身でも厭はぬものを、こんな死人が何でせう。』

そこで王孫の看護を老僕に頼み、(7) 田氏は片手に斧、片手に燈を持つて、すぐ後の部屋に行き、燈を下に置き、兩手に滿身の力をこめて斧を棺に向つて打下した。棺の蓋は開いた。——と不思議や、莊子は溜息をつきながら徐ろに立上つた。(8)

田氏は驚いて腰がぬけ、斧を覺えず取落した。〔四七〕

該当箇所は会話文であるため、基本的には白話(口語)的表現を使用すべき場面であるが、場面設定は戦国時代であるため古語的・文言的表現も少なくない。そのため翻訳者は白話語彙のほか文言の知識や由来を把握している必要がある、それらを如何に的確に対応するかが課題となる。そのためこの箇所では文言的な解釈の必要上、原文の訓読的翻訳も考慮して考察する。

まず網掛部(1)「叫蒼頭顧喚近山莊客、扛擡莊生尸柩、停於後面破屋之内」であるが、これは難解な箇所である。例えば「蒼頭(cāngtóu)」は、文言と白話それぞれで意味が異なる。書面語では雑用係の僕である奴僕・下僕、そして兵卒の意味があるが、白話語彙では老人を意味する。そのためどちらで解釈すべきか。その判断は難しく、駒田信二訳でも「老僕」と折衷的な訳語を使っている。ただ該当箇所は文言による表現が多用されているため、前後の文脈から奴僕と解釈すべきであろう。次の「顧喚(gùhuān)」は、呼び集める。「莊客(zhuāngkè)」は莊子ではなく、旧時の小作人や作男を意味するので注意が必要である。ただ作品の舞台である戦国時代に小作人が一般化していたのかは定かではない。ただ「三言」所収篇には舞台設定が古代であっても、その作品の中の固有名詞や名称は、刊行当時の

読者である明代の呼称名称が使われるのが一般的である。これは先行研究でも指摘済みである〔四七〕。「扛擡(kāngtái)」は二人で持ち上げる、肩に担ぐ。「尸柩(shījū)」は屍骸を収めた柩を意味するほか、この箇所の文体も複雑で二重の使役表現となっている。主語は省略されているものの、ここでは田氏(莊子の妻)であり、彼女は奴僕に近くの作男を呼び集めて、莊子の遺骸の入った柩を担がせ(自宅の裏にあるあばら屋に安置させた。という意味となる)。この箇所を近藤は「小作人に棺を後の空いた建物の中に運ばせた」とある。「破屋(pòwū)・あばら屋・ぼろ屋」を「空いた建物」というのはやや原義と異なるほか「顧喚」「扛擡」は文脈上省略されている点が気になるものの、「蒼頭」「莊客」「尸柩」等は概ね的確に翻訳を行っている。

網掛部(2)「草堂内擺得燈燭輝煌」の「擺(bǎi)」は名詞的用法もあるが、様態補語の「得(de)」を伴うため動詞的活用であるのは明らかで「並べる・置く」もしくは「揺れ動く」と解釈するのが妥当である。しかし、続く「燈燭輝煌(dēngzhú huīhuāng)」で灯火が光り輝く程度を示している所から、網掛部は「灯火が明るくゆらゆらと草堂の中をともした」の意味となろう。この点を近藤は「家の中は燈火も華やかに輝き」とある。近藤は「擺(bǎi)」を動詞として扱っているものの、左右に揺れるという動詞としての意味を充分理解していたかは判然としなない。

次の網掛部(3)「交拜已畢」であるが、「交拜(jiāobài)」は「拜堂(bàitáng)」や「拜天地(bàitiāndì)」とも呼ばれ、旧時婚禮の時に新郎・新婦が礼堂で跪坐して舅姑を拝し、天地を拝し、お互いを礼拝する儀式を行うことを意味する。これは白話の語彙ではない

め、翻訳には白話語彙以外の知識が必要となる。この箇所を近藤は「祝言の式も滞りなく済んだ」と翻訳している。祝言は、嫁入りの儀式を行なうこと、また、その式や婚礼、結婚式の意味^{四十二}であり、日本の伝統的な結婚式を意味する。当然中国の小説であるから、この訳語では日本人にも理解しやすい祝言の式を選んだと思われるが、駒田信二訳では「儀式が終わると」と漠然としており、原文の理解においては近藤訳の方が確と判断できるのである。

網掛部(4)「其命合休矣」であるが、「合(he)」は當・應と同じく「まさにべし」であり、訓読すれば「其れ命合に休すべし」となり、この命も万事休し何をしても駄目だという意味である。近藤はここで「もうこれまでです」と的確に翻訳している。網掛部(5)「何不斲棺而取之」は「何不」を使用した反語文である点に注意が必要である。「何不(hebu)」は、なぜししないのかという反語形に用い、転じてすべきである、ししてよいの意味にも解釈できる。「斲(zhuo)」は切る・削るであるから、原文を訓読すれば「何ぞ棺をち之を取らざるや」となり、語気助詞がないので、どうしてお棺を切り開いて取らないことがあるのか——お棺を開くべきでしょうという意味となろう。この箇所を近藤も「あの棺を開いて脳味噌を取つてはどうでせう」としており、ここでも文言の反語表現を正確に理解した上で翻訳していると言えよう。

次の網掛部(6)「自身尚且不惜、何有於將朽之骨乎」も文語文であり「將」は「まさにす」の再読文字である。訓読すれば「自身すら尚お且つ惜まざる、何ぞ將に朽ちたらんとするの骨有らんや」となり、自分の身体だって惜しくないのに、どうして朽ちかけよう

としている骨を惜しいことがあるか(いいや惜しくない)となろう。この箇所を近藤は「私の身でも厭はぬものを、こんな死人が何でせう」と翻訳している。やや意識しているが田氏の莊子に対する感情を加味したものと思われ、これは文脈から田氏の性格を理解していないと、この訳にはならないだろう。

網掛部(7)の「右手提斧、左手攜燈、往後邊破屋中、將燈放於棺蓋之上。覷定棺頭、雙手舉斧、用力劈去」であるが、「攜(xie)」は携える、手に持つて持ち運ぶ。そして次の「將(jiang)」は、口語の「把」と同じく「を」を示す介詞であり、網掛部(6)の「將」とは大きく意味が異なる。「覷(que)」は白話語彙若しくは福建方言に見える、探る、うかがい見るであり「覷定(quadng)」で見定めるの意味であろう。ここでは(田氏が)右手に手斧を、左手に灯りを携え裏のあばら屋に向かい、灯りを棺の蓋の上に置くと棺を見定め、両腕で斧を持つと、力をこめて振り下ろし(お棺を)割ったという意味となる。この箇所を近藤は「燈を下に置き、両手に満身の力をこめて斧を棺に向つて打下した」と翻訳し、簡略化しているが「將(を)」の介詞的表現も明確に理解している。そして網掛部(8)「嚇得腿軟筋麻、心頭亂跳、斧頭不覺墜地」である。文頭の「嚇(xia)」は副詞的用法もあるが、ここでは動詞で「驚く、怖がる」の意味、そして「腿軟筋麻(turranjinma)」は、酷く驚き腰が抜けた状態になる様子や、足がふらふらになり筋がしびれる状態を示す成語である。そのため(田氏は)恐怖で足がふらつき、胸が高鳴るあまり、思わず斧をとり落としたりしたとなる。そこを近藤は「田氏は驚いて腰がぬげ、斧を覺えず取落した」と成語の箇所も的確に翻訳している。

(3) 近藤の翻訳「莊子とその妻」の評価

以上、近藤總章による翻訳「莊子とその妻」について、原文と駒田信二訳との対照を実施し分析を行った。

近藤の翻訳であるが、まず言えることは『滿蒙』の誌面的制約がありながらも、作品の内容を正確に訳出しているという点である。そしてその要約的確さは加藤が原文を十分に理解した上で、物語の進展に大きな影響を与えない箇所を選び出し、不要な部分だけを少しづつ削り落とすという精密な取捨選択を行った事に由来していることがわかる。従来の民間翻訳では、難解箇所や難解語を回避するために、翻訳箇所の一部を丸ごと割愛する場合が一般的であったことを考慮すると、近藤訳の省略の方法は、他の事例には見られない特徴と言える。

また「莊子休」は、その作品の特性上、口語的な白話と文語文である文言の文体と語彙が混在している。そのため白話や文言という片方の知識のみならず、双方の語学的知識をそれぞれ具備しなければ正確な訳出はままならない。その点が却って訓読翻訳に長じる日本の唐話学者には（一般的な白話小説よりも）与しやすい作品として舶来当初に盛んに受容されることとなった。しかしその後百年にわたって翻訳の手が付けられなかったのは、蓋しその後百年に混在したこの特殊事情に由来したものである。

その点で加藤訳は、白話や文言での難解語句の解釈、そして複雑な文体に関しても正確に理解的確な訳語を施しており、一部では

あるが駒田信二訳よりも正確な箇所があるなど、その水準は刮目に値する。

なお一部で意識は認められるものの、誤訳は同時代の民間翻訳に比べても極めて少なかった。誌面の都合から訳文や圧縮されたものでも関わらず、民間翻訳として高い水準にある。そして「三言」所収篇の受容史の上でも、唐話学的な訓読翻訳から学術的翻訳へという流れの中における過渡期的存在としての民間翻訳の役割を明確に示した翻訳であると言える。

紙幅の都合から、近藤の翻訳「莊子とその妻」の分析は以上とするが、この近藤の翻訳は民間翻訳の上でも画期に値する翻訳であり、斯界に於いて半ば定説のごとく語られることの多い民間翻訳のあると思われる。この翻訳精度の詳細について、また掲載された邦字雑誌『滿蒙』については、次稿で詳述することとしたい。

おわりに

本論の内容を要約すると、以下の通りである。

I 小論では、筆者が発見した近藤總章による翻訳「莊子とその妻」(一九三〇)に注目し、近藤が取り組んだ翻訳の一端を考察し、先行研究の補完を行った。

II 「莊子とその妻」の原作「莊子休鼓盆成大道」(『警世通言』卷二「今古奇觀」卷二〇)は、日本は舶来直後に読本『英草子』に翻案作品として、そして文化年間に『通俗古今奇觀』に訓読翻訳が登場する。

しかしその後は大学の研究者である魚返善雄による現代口語訳まで翻訳の事例は確認されていなかった。そのため近藤訳の発見は、初めての口語翻訳として、かつ唯一の民間翻訳の事例として受容史上重要なものであった。

Ⅲ 翻訳者の近藤總草については、現時点でも不明点が多い。ただし近藤總草が作詞した校歌から一九三五年～三八年の時期に奉天朝日高等女学校に在職していたこと、そして彼の著作『滿洲支那傳説物語』から、滿洲事変前の関東州や、事変後の滿洲国などの旧外地にある各地の学校に赴任した教員の可能性が高く、かかる現地での物語収集作業の一環として「三言」所収篇を翻訳していたと推測できる。

Ⅳ 近藤の翻訳状況であるが、誌面掲載の制約から訳文の中には原文の省略が見られた。その省略は特徴的で、原文の中から文脈に影響を与えない箇所や冗長と思われる表現を確認しながら削除してゆくとという方式である。この場合には原文の中で文脈上の要不要を逐一判断しなければならず、作品全体を正確に理解していなければ実施できない。近藤はその方法を採用しており、それが彼の原文理解の正確さと翻訳水準の高さを示す証左となっている。

Ⅴ 近藤による「莊子休」は、白話と文言の何れの箇所においても正確な翻訳箇所が多い。そのため、白話小説を読解する上で必要な語学的知識のほか、文言に対応するだけの訓読の知識も十全に備えている翻訳者であることが推測できる。なお一部で意識は認められるものの、誤訳は同時代の民間翻訳に比べても極めて少なかった。誌面の都合から訳文はやや圧縮されたものであったが、近藤は参考

となる先行する口語翻訳がない状態にもかかわらず、民間翻訳としては高い水準にある。そして「三言」所収篇の受容史の上でも、唐話学的な訓読翻訳から学術的翻訳へと流れの中にあつて、その過渡期的存在としての民間翻訳の役割を明確に示した翻訳であると見えよう。

(附記) 本論文は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)「民間の視座を導入した中国通俗文芸の受容と自国化の研究——受容文化の多角的考察を目指して」の研究成果の一部である。

注

【一】 都賀庭鐘「古今奇談英草紙」「黒川源太主山に入ッて道を得たる話」については、尾形仿「中国白話小説と『英草紙』」(『文学』三四卷三号、一九六〇)、張海燕「『古今奇談英草紙』と白話受容」(『立正大学国語国文』五三号、二〇一四) 参照。

【二】 『通俗古今奇観』については、青木正兒校註『通俗古今奇観・附月下清談』(岩波書店、一九三三) 参照。

【三】 近藤總草「莊子とその妻」(『滿蒙』一一卷五號、一九三〇)。

【四】 魚返善雄「莊子の妻」(『中国千一夜(風雅の巻)』(日本出版協同、一九五二)。

【五】 千田九一、駒田信二『今古奇観(3)』(平凡社、一九六六)一〇六～一二六頁。

【六】 辛島驍「待ちきれぬ妻」(辛島驍訳『全譯中國文學大系 第一集第六卷 警世通言(一)』(東洋文化協会、一九五九)。

近代日本に於ける『警世通言』卷二「莊子休鼓盆成大道」の受谷について

【七】 駒田信二「莊子休盆を鼓いて大道を成すこと」(千田九一・駒田信二訳『中国古典文学大系 第三七巻 今古奇観(上)』(平凡社、一九七〇)三七二―三八二頁参照。

【八】 大庭脩「江戸時代における唐船持渡書の研究」(関西大学東西学術研究所研究叢刊、一九六七)参照。

【九】 詳細は、中村幸彦「古義堂の小説家達」(『国語国文』二二巻一号、一九五二)、宮本陽佳「唐話学と白話小説」(『和漢比較文学』六五号、二〇二〇)参照。

【十】 ①『英草子』第一篇「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」(『警世通言』巻三「王安石三難蘇學士」) ②『英草子』第二篇「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」(『古今小説』巻二七「金玉奴棒打薄情郎」) ③『英草子』第三篇「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」(『警世通言』巻一「俞伯牙摔琴謝知音」) ④『英草子』第四篇「黒川源太主山に入つて道を得たる話」(『警世通言』巻二「莊子休鼓盆成大道」) ⑤『英草子』第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」(『古今小説』巻三「闇陰司司馬貌断獄」) ⑥『英草子』第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」(『古今小説』巻二「眾名姫春風巾柳七」) ⑦『英草子』第七篇「楠弾正左衛門不戦して敵を制する話」⑧『英草子』第八篇「白水翁が売卜直言奇を示す話」(『警世通言』巻一三「三現身包籠圖断冤」) ⑨『英草子』第九篇「高武蔵野牌を出だして媒をなす話」(『古今小説』巻九「裴晉公義還原配」)。

【十一】 丸井貴史「三言」ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』(『近世文藝』九七巻、二〇一三)参照。

【十二】 詳細は、徳田武「『英草紙』論」(『近世文藝』一八号、一九七〇)、丸井貴史「三言」ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』(『近世文藝』

九七号、二〇一三)、顔景義「前期読本作家都賀庭鐘の中国白話小説への利用法について」(『富山国際大学現代社会学部紀要』第一二巻第一号、二〇一九)参照。

【十三】 梅野正信「日本統治下中等学校の校友会雑誌にみるアジア認識」(『上越教育大学研究紀要』三四号、二〇一五)六一頁参照。

【十四】 『童心行』については、寺前君子「満洲における石森延男の足跡——同人雑誌『童心行』の概要と細目」(『中国児童文学』二二号、二〇一一)参照。

【十五】 石森延男「満洲児童文学回顧」(『児童文学研究』二二号、一九七二)、「はじめに」『協和(復刻版)』(龍溪書舎、一九八三)参照。

【十六】 満鉄会編『協和』総目次(龍溪書舎、一九八三)によると、『協和』誌上における近藤總草の作品は以下の通りである。

- ①「夢やいづこ」(『協和』三巻九號、一九二九年四月)
- ②「童話の頁 龍になり損ねた話」(『協和』四巻一四號、一九三〇年七月)
- ③「童話 龍王廟」(『協和』五巻三號、一九三二年二月)
- ④「建國の人柱」(『協和』六巻二四號、一九三二年二月)

【十七】 魏晨「満洲」童話作家・石森延男の登場——満鉄社員会機関誌『協和』における創作活動を手がかりにして(『跨境』創刊号、二〇一四)参照。

【十八】 主要なものとして尾崎秀樹「旧植民地文学の研究」(勁草書房、一九七二)、川村湊「異郷の昭和文学」(岩波書店、一九九〇)、川村湊『文学から見る「満洲」』(吉川弘文館、一九九八)、岡田英樹「文学に見る「満洲国」の位相」(研文出版、二〇〇〇)、西原和海他「満洲国の文化」(せらび書坊、二〇〇五)、尹東燦『満洲』文学の研究(明石書店、二〇一〇)、岡田英樹『続 文学に見る「満洲国」の位相』(研文出版、二〇一三)、劉春英「中国東北部における日拠時期の日本語雑誌の言説空

間」(『跨境』一五号、二〇一四)等を参照のこと。

【十九】岡田英樹「中国語による大東亜文化共栄圏——雑誌『華文大阪毎日』の友」の世界」(『中国東北文化研究の広場』二五号、二〇〇九)参照。

【二十】西原和海「二つの『芸文』」(『植民地文化研究』三三号、二〇〇四)、岡田英樹『続文学にみる「満洲国」の位相」(研文出版、二〇一三)一九四、二一五頁、単援朝『雑誌『芸文』の成立と変遷について』(『跨境』創刊号、二〇一四)参照。

【二十一】大久保明男「中国日裔青年文芸雑誌『北辰』紹介」(『朱夏』一一号、一九九八)参照。

【二十二】橋本雄一「二言語の間にもたらされた権力——雑誌『満洲国語』における中国人作家たち」(『野草』六四号、一九九九)参照。

【二十三】李青「雑誌『麒麟』に見る女性作家群像」(『立命館文学』六〇八号、二〇〇八)参照。

【二十四】王志松「翻訳と『満洲文学』」(『跨境』一五号、二〇一四)、林濤「満洲浪漫」における「白日の書」への一考察」(『跨境』創刊号、二〇一四)参照。

【二十五】劉曉麗「偽満洲国時期附近作品的表裏」(『中国現代文学研究叢刊』四号、二〇〇六)、祝然「戦争末期の『北窓』」(『跨境』創刊号、二〇一四)参照。
【二十六】『國語教育』創刊と主幹・保科孝一については、永田洋史「大正期・雑誌『国語教育』の意義に関する一考察」(『言語文化学研究 日本語日本文学編』一五号、二〇二〇)参照。

【二十七】詳細は代珂『満洲国のラジオ放送』(論創社、二〇二〇)参照。

【二十八】代珂『満洲国のラジオ放送』(論創社、二〇二〇)二七四頁参照。

【二十九】これら満洲における郷土文芸の動きは満鉄社内でも確認される。近

藤も寄稿した『協和』では「満洲郷土文芸十二種懸賞」として、「満洲の郷土文芸がほしい。満洲最大の読者層を持つ我等の『協和』は常に門戸を開放し、鶴首して良き作品を待つてゐるが文芸の投稿はまことに少ない。公務に追はれても秋の灯の下に詩情の湧く瞬間もあらう。我等は協力して満洲郷土文芸をはぐくみ育てよう。出来るだけ満洲色のある作品を作り出さう」という懸賞広告が満鉄社員に向けて呼びかけられている。魏晨「満洲」童話作家・石森延男の登場」(『跨境』創刊号、二〇一四)一七八頁参照。

【三十】竹田復「話本の入話について」(『漢文學會々報』六号、一九三七)、金丸邦三「宋代小説話本の形式について」(『東京外国語大学論集』一五号、一九六七)、拙稿「話本における『まくら』について」(『論究』二四号、一九九二)、鄭天剛「宋元話本入話的类型」(『松山大学論集』五卷五号、一九九三)参照。

【三十一】小川陽一『三言二拍本事論考集成』(新典社、一九八二)一〇二頁参照。
【三十二】駒田信二「莊子休盆を鼓いて大道を成すこと」(千田九一・駒田信二訳『中国古典文学大系 第三七卷 今古奇観(上)』(平凡社、一九七〇)。

【三十三】駒田信二「莊子休盆を鼓いて大道を成すこと」(『今古奇観』(平凡社、一九七〇)三七三～三七四頁参照)。

【三十四】近藤總草「莊子とその妻」(『滿蒙』一一卷五號、一九三〇)一二六頁参照。

【三十五】拙稿「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について——佐藤春夫『百花村物語』を中心として」(『アジア史研究』三三二号、二〇〇八)参照。

【三十六】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容につい

近代日本に於ける『警世通言』卷二「莊子休鼓盆成大道」の受容について

て——明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」（『国際文化
研究科論集』一四号、二〇〇六）参照。

【三十七】拙稿「井上紅梅による『今古奇観』の翻訳について」（『国際文化研
究科論集』二六号、二〇一八）参照。

【三十八】榛原茂樹による「三孝廉讓産立高名」（『醒世恆言』卷二・『今古奇観』
卷一）の翻訳は「三孝廉（上・下）」（『同仁』四卷三〜四號、一九三〇年
三〜四月）、②「李謫仙醉草嚇蚕書」（『警世通言』卷九・『今古奇観』卷六）
の翻訳は「李白傳」（『同仁』四卷五號、一九三〇年五月）、③「金玉奴棒打
薄情郎」（『古今小説』卷二七・『今古奇観』卷三三）の翻訳に「薄情郎を打つ」
（『同仁』四卷八號、一九三〇年八月）がある。

【三十九】駒田信二「莊子休盆を鼓いて大道を成すこと」（『今古奇観』（平凡社、
一九七〇）三七九〜三八〇頁参照。

【四十】近藤總草「莊子とその妻」（『滿蒙』一一卷五號、一九三〇）一三二〜
一三三頁参照。

【四十一】荒木猛「短編白話小説における新旧諸相の弁別」（『集刊東洋学』三九号、
一九七八）参照。

【四十二】日本国語大辞典（第二版）編集委員会『日本国語大辞典（第二版）』（小
学館、二〇〇一）一一二六頁参照。